

## 第5回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

1 日時 平成17年8月18日（木）午前9時00分～午後0時00分

2 場所 伊那市生涯学習センター〔いなっせ〕 会議室701、702

3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	川島 一慶委員
小坂 樫男委員	丸茂 貴子委員
岡庭 一雄委員	小池 博委員（校務により10:30早退）
小林 辰興委員	関 哲夫委員
小口 武男委員	藤本 功委員
北原 曜委員	

4 開会

（池上委員長）

それでは、第5回の高校改革プラン推進委員会を開会いたします。よろしくお願いいたします。

まず、資料の提供と説明が事務局からありますのでよろしくお願いいたします。

5 資料説明

吉江高校教育課長（資料9・10）、野村主幹教育支援主事（資料1から8）から資料説明【説明内容省略】

（野村主幹教育支援主事）

資料の説明は以上でございますが、そのほかに委員さんの机の上には要請書が3件あると思います。これらは、池上委員長さんのところに届けられたものでございまして、それを委員長さんと相談しまして、今日お配りいたしましたのでご覧いただければと思います。

以上でございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

それでは、資料の内容についてご質問、ご意見をちょうだいしたいと思います。たくさん資料をいただいておりますので、後でよく見ないと分からないということもあると思います。ご質問がございましたら、どうぞ。

（小池委員）

お願いします。

資料の9、10を見まして、長野県の財政が、はっきり言えばもうお金がないということで、末期的な状況だということはよく分かるわけです。ただ私は、高校の統廃合にかかわってどのくらいの経費が浮くのかとか、これらが県財政にどのようにプラスになっていく

のかという関連について、この資料のみでは分からないわけです。

例えば、たたき台で県が出された削減案にかかわり、財政的にも「これだけの額が軽減される」というような事例がないと、この資料を提供されても、高校改革プランとどう関係があるのかという部分について、私には見えません。その所はどのようになっているのでしょうか。

（吉江高校教育課長）

第４回目の飯田で開催されました推進委員会におきましては、『最終報告』の資料に基づいて、若干イメージにつきましてお示した経過がございました。その折にも若干申し上げましたが、実は現在まだまだ今後どのような形でそれぞれの統合対象校が出てくるのか、さらには、統合の結果としてでき得る学校自体が、どのような学校になるのか、極論を言いますと学科がどのようなもので設置されてくるのか、あるいはどんな形の規模になって設置されるのかというようなことによりまして、かなり変化があるということでございます。

その変化がある中で、私どもといたしましては、実は、これは６月の県議会においても質問が出た内容ではございますが、数字というようなものということになりますと、現在持ち合わせておりませんし、また今申し上げたようないろいろな条件がある程度以上定まった段階でないと、責任を持ってお示しするわけにはいかないと考えております。

具体的には、例えば　という数字が出たとして、その数字が変な形で独り歩きするのもしいかかかなと思いますが、ただそういうような数字につきましては、この第三推進委員会におきましても何らかの数字が出てほしいといった議論が今までも出ていたことは確かでございます。しかしながら、それを取りあえず、現在そういうことで持ち合わせておりませんが、しからば、県の財政状況を過日の東信の推進委員会においてもそうなのですが、現在出せないということであれば、県の財政は現状においてはどのようなのだということについては、まずは話を聞きたいというようなお話もございましたので、合わせてこの委員会におきましてもお出しして、ご説明した次第でございます。

今後の議論の中である程度の段階には、数字的なものも具体的な形になってこようかと思っておりますが、現時点においてはそんな状況ということでご理解いただきたいと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。

正直な話を申し上げますと、このたたき台の数字で果たして財政的に整合性が取れるものかどうかというところが、ひとつ問題があるように私は思います。そういう認識でいきますと、しょせん分かっていることをあまりしゃべらないとも取れる側面もございますが、この点はいかがなものでございましょう。

(吉江高校教育課長)

今も申し上げましたように、現時点においてある程度以上、4つの委員会におきまして統合の対象の議論をなされて、方向付けがある程度なされた段階になってみないと、なかなか責任を持った形での数字というのは出しにくいのではないかと考えている次第でございます。

(小池委員)

いいですか。

財政問題がひとつにあるとすれば、たたき台で挙がったものについて事例を幾つかつくり、例えばの例として、これだけの経費が削減できますよ、というような事例を提示することができないものかと思うわけです。

財政的資料を見せられて、県は今こうなっていますよ、ということはわかったわけですが、これと高校を改編する、改革をすることとの財政面における関連がよく分からないわけです。そここのところの部分の説明が5例でも6例でも並行的に出され、こうだからどうなんだという理解が深まるのですが。そういう意味で言っているのです。

(吉江高校教育課長)

かねてより申し上げておりますように第一次的には、私どものほうは今回の改革プラン自体が、学校の小規模化をこのまま進めていいのかと。十分な高校教育を提供する意味におきまして、今後支障が出てくるということを大前提で考えております。その議論の中で、反面派生する内容としまして財政問題というのが出てまいりましたので、それにつきましては、かねてより若干なりともこれ以外の資料を集めましてお出ししているわけなのです。

ただ、こういうようなものにつきまして、今、小池委員さんからお話がございましたような資料につきましては、また検討させていただくとしまして、直ちにご準備するわけにはいかないものですから、またその辺は適宜検討の中でご提示できる限り、できるものはさせていただきたいと考えております。

しかしながら、先ほど来申し上げておりますように、数字というようなものは出しますと、その数字自体が独り歩きしてしまいますものですから、それが果たしていいのかということについては、事務局といたしましても若干疑義があるところでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。よろしいですか。

この辺の議論は、心得ておいていただいて、またやっていきましょう。

ほかは、いかがですか。

よろしいですか、この資料の内容については。

私のほうからひとつ、今の関連で、ちょっと教えていただきたいのですが、我々は企業会計ばかりをやっておりますので、そういう側面で私は少なくともよく分からないというところもあります。これでよろしいですか。要するに全体の経費というのは、まず人件費ありきということがありますね。それから通常はその他のいわゆる出費がございます。これは1割程度と伺っておりますが、その他学校のインフラや、建て替えたとか、そうい

うものについての費用というのは、どこにいったい明示されているかということについて、教えていただきたいのですが。

（吉江高校教育課長）

県の予算の関係で申し上げますと、いわゆる民間企業の場合の減価償却費に当たるようなものというのは、予算上あるいは歳出上は積算されておられません。ですから建設してしまったものは、いわゆる建設時期に、必要に応じて予算化をいたしまして、それで歳出をするというような形を取っていますから、そういう意味では減価償却にかかわるような経費というのは、どこにも出てこないということでご理解をいただきたいと思います。

（池上委員長）

それでは、そうするとその時点でまた経費の計上をするということですね。

（吉江高校教育課長）

一般的には、ＲＣ、いわゆる鉄筋コンクリートの場合は耐用年数が60年というイメージでございますので、例えばその間の中ほどぐらいに若干リニューアルをして、耐久性を保持しつつ60年ぐらいたった状況、さらには建物の内容にもよりますので、その時点における状況等を確認した上で、その時期に応じて必要な経費を予算化していくということでご理解いただきたいと思います。

## 6 議事

（池上委員長）

ありがとうございました。

特にご質問がなければ、次に移っていきたいと思いますが、よろしいですか。では次の議題に入らせていただきます。

これからは、いわゆる適正配置、「魅力ある高校」という、いわゆる命題についての議論にいきたいと思いますが、まず前回も実情を少し調査をさせていただいたということがございましたので、これはもう先に、ある意味では議論をしておかなければいけないと私が思っているのは、いわゆる地域校の問題でございます。

阿智高、阿南高を見せていただきましたが、それはそれなりに、やはり存在する理由があるのだらうなというふうに認識をしまいましたが、これについてぜひご意見を賜って議論を進めていきたいと思います。ここからは、結局「魅力ある高校」というところに当然入ってまいります。合わせて議論をさせていただくということになると思います。

そういう範疇（はんちゅう）にありますのは、どういう仕分けをするかは別として、例えば上伊那では高遠高校。諏訪はちょっと私の認識がありませんが、たぶんそういう範疇にあると目されるものは富士見あたりかなと私はと思いますが、これは地域をよくご存じの方が、またご説明いただければいいのではないかと思います。

大体そのあたりの高校が、ひとつテーマとして上がってくるだろうと思いますが、この点については、ぜひ議論を闘わせていただきたいと思います。よろしくお願ひしたいと思ひます。

特にここで言えることは、恐らくコスト的な立場で見ると、生徒一人当たりのコストがかなり高くなるということが特徴的でございますし、また「魅力ある」というところを本当の意味でしっかり議論ができるかどうかということになりますと、率直に申し上げて現場の先生方は大変困っているのではないかと思います。これは地域にある高校として、地域を支えるという意味は確かにあると思いますので、そういう側面でも合わせてご議論をいただきたいと思っておりました。

（熊谷委員）

よろしいですか。

地域校の、私どもの地元の阿智、阿南というお話が今出ましたが、阿智高校なり、阿南高校なり1校をとらえて、この高校をどういう存在価値があるかうんぬんという議論をされれば、当然そのような意味もあるし、議論もされると思うわけですね。

ただ今回の高校再編というのは、実は飯田・下伊那の議論は今、いろんなレベルでされているのですが、専門高校と普通高校が配置されていて、例えば普通高校でいきますと飯田・下伊那に5校もあるわけですね。それをさらに、どのように飯田・下伊那として高校を配置していくことが、これからの教育レベルなり水準はどうなんだろうという議論だろうというように思うわけですし、単純に地域校だからという地域校1つをとらえて必要かどうかという議論をするのが今回の議論かなというように、どうもそこが私はひっかかっております。

飯田・下伊那の議論というのは、私が今言っているのは、今教育委員会のほうから、下伊那農業高校と長姫高校の再編というように出てきているわけですが、専門教育という部分と普通高校の配置、地域高校、いろいろな総合的に見てどうなんだという議論がされなければいけないのではないかなというのが、今飯田・下伊那の議論でありますので、そのところを、ただ単純に地域高校をどうするんだという、1校か2校に絞ったという議論になってしまうとおかしくなってしまうのではないかなという気がしているのです。

今回のこの高校再編議論というのは、まさに地域における高等学校教育をどうするんだというトータルで話していかなければいけないというように思っておりますし、また戻りますが、飯田・下伊那というレベルで議論をさせてほしいということだという部分だということです。

（池上委員長）

お説のとおりだと私も思うのですが、私は2つの仕分け方があると思います。

1つは、今のお話の地域校、それからあと、都市型というよりはいわゆる通勤圏内に近い高校、このように申し上げたほうがいいと思います。むしろそういうような仕分けをさせていただいて、地域校の存在価値というのは少し別格で扱ったほうがいいのではないかなというように思いまして、それは総論的にはむしろ今熊谷委員のおっしゃったお説のとおりだと私も思いますが、なかなかそうもいくまいなとも考えておりましたので、そこから議論をまとめていくというように考えております。

ただ都市型の高校については、かなり選択肢はたくさんございまして、これは後ほどまた内容の議論やご説明をいただいて、まとめに入っていきたいと思っておりますが、まず、

その中での地域校というように考えておりましたので、そういう方向でやらせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

（北原曜委員）

地域高校の議論を始めるのはそれでいいと思うのですが、普通科は、いわゆる「進学校」以外の「習熟途上校」と言いますか、そういうところも含めて、かなり共通の問題点が潜んでいるように思うのです。その辺を少し分類して検討したほうがいいかなと思います。

検討資料として、私の考えですがちょっとつくってききましたので、皆さんに配っていたきたいと思いますので、よろしくお願いします。

これはあくまでも私案なのですが、「魅力ある高校」というのはどういうものかという定義付けをしまして、分類をしています。普通科は、「進学校」と「習熟途上校」、それから「地域校」と、3種類に分けました。それから職業科については、工業、商業、農業と分けてあります。その他の学科として2つぐらい掲げてあります。それぞれ現状での評価、どのような努力がされているか、そして「魅力ある」それぞれの高校というのとはどういうものかというもので、ちょっと検討してあります。

この中で、いろいろそれぞれの、例えば「進学校」の問題点、「習熟途上校」の問題点というものを皆さん方で出していただいて、それで議論を進めていったらどうかと思います。

今、2ページ目の一番上のほうになります「地域高校」。一応該当する高校はこういうもので、かっこ内は入学定員です。その評価、現状の努力、「魅力ある」地域校という形で、私見ですが書いてあります。

このように各委員さんで、それぞれ評価、現状の努力、「魅力ある」地域校の理想像というものを検討されていったら、浮き彫りになってくるのではないかなと思います。

以上です。

（池上委員長）

この2ページ目のBから、もう少し詳しく説明いただけませんか。

（北原曜委員）

職業科は、工業高校、商業高校、農業高校と、学科も普通科と併設されているところもありますので、それはそれで分けて書いてあります。

例えば工業高校は3段になっていますが、それは岡谷工業、これは旧第7通学区、箕輪工業は旧第8通学区、飯田工業は旧第9通学区という形で、旧通学区ごとに3段にしています。

工業高校の評価ですが、この評価については私見ですので、皆さんの意見をここで出していただいて、それから現状でどのような努力が教員の間や学校の中でされているのかということも評価して、最終的にどういう理想的な学校を目指したらいいのかというようなことが書いてあります。

これは一例ですが、このように各委員さんの意見が出て、その中で浮き彫りにされていた問題点を解決するにはどうしたらいいかということで、最終的には総合学科とか多部

制・単位制なりに、どのようにつなげていくかということを検討していったらいいのではないかなと思います。

以上です。

(池上委員長)

はい、ありがとうございました。

私も、こういう仕分け方は大変重要な問題だと思いました。特にこの中で言えることは、例えば工業系の高校は、ハードの世界もかなり持ち合わせないと、教育できないということがありますし、また、農業学校も同じような形でそういうことが言えるのではないかと思います。従って、議論のときに、そこところの議論が重要になるというふうに思っています。

あと商業科と普通科というのは、比較的ハードの世界が寄与度としては大きくないということがありまして、割合に統合ができるような形になるのではないかという、実は私見は持っておりまして、参考資料を大変ありがとうございました。

それでは、この資料の中でも地域校の話も出ておりますが、ちょっと固執して申し訳ないのですけれども、地域校の議論を継続させていただきたいと思います。

いかがでしょうか。

(岡庭委員)

いいですか。

地域高校の問題を議論する前に、今、北原さんの出していただいた資料に関連して、日ごろ私が感じていることなのですが、ここに学校の北原さんなりの種別というのがあるわけですが、実は県立高校全体で考えてみて、では普通科で「進学校」とか「習熟途上校」だとか「地域高校」だとかということを、これを暗黙の中での了解事項であって、誰もそのことを明確にしているわけではないわけです。

先日、飯田高校と松川高校を見させていただきました。阿智高校もそうですが、授業内容そのものが違うわけで、教科書も違うと、もう歴然たる状況にあるわけです。

では高等学校を選択するときに、暗黙の了解だけであって、ここの高校は実は学力テストが何点以上でないと入れないとか、何点以下は入れないとか、ここの高校はこういうことだとか。じゃあ授業内容について、ここの高校は共通一次試験には対応できる授業はできませんとかというような形で、明確に情報が公開されて学校を選んでいないわけですね。

そのことが、言ってみれば、子どもの学校に対する意欲の問題、入ってから、行きたい高校ではない、行かされた高校だという形で中途退学が増えるとか、あるいは学力差の問題が出てくるわけで、ここのところをどういう形で乗り越えていくのかということが、私は、97%とほぼ義務教育化してきた高校の状況を考えると、それは暗黙の了解があるといっても、かつてのように60%ぐらいが高校に入っていた頃はお互いにそういう状況の中では、たぶんあっても仕方なかった状況があったのだろーと思いますけれども、ほぼ義務教育化したこの段階の中でその情報が公開されないと。暗黙の了解で、そのことが中学校の先生の進路指導で選ばれて行く。このことが、現在の状況の中で、本当にあっていいこと

なのかどうかということがひとつあると思います。

このことが地域高校の問題もここに書いてございますが、まさにそういう状況の中で、地域高校の問題というのは非常に大きな問題で出てきているだろうと思うわけですが、特に、この高校改革プランのところで通学可能圏域ということが書かれているわけですね。大通学区制になったということと、通学可能圏域という問題というのは、どのように考えていくのかということが、やはり地域高校の問題を考える上のひとつの大きな課題ではないかと思っております。

もう1点は、職業学校の問題ですね。職業学校についても、先日の資料等を見させていただいても、例えば農業学校を出ても農業に従事しないということから、職業高校ではいろいろあるわけです。職業学校そのものが、実は、ここでいう「習熟途上校」にある程度はめられているのではないかというように思うんですね。

ですから要するに、本当は農学校へは行きたくはないが、阿智高校は遠いと。松川高校も遠いと。では農学校へ行ったらどうかとって農学校へ行って、農学校を終えて、じゃあ次は専門学校へ行こうではないかというようなことになってきているので、職業学校そのものも、実は本当にかつての職業学校の流れをくんでこういう形でいるのですけれども、それでいいのかどうかという議論にもなっていくと思います。

もっと大事なのが「習熟途上校」ということを大いに増やすことでは、都市部の学校の中に私は「習熟途上校」をたくさん増やすことではないかと思います。そのことがやはり、地域高校全体のレベルアップというところにもかかわってくるのではないかという気もしているわけです。

このところについて、どのように皆さんがお考えなのか、私としてはその率直なところをお聞きしたいと思っています。先日も委員長が学校をご覧いただいて、両方の高校を見させていただいた感じからいって、私も率直にそういう感じを得てきているわけでございます。

(池上委員長)

ありがとうございました。

議論がかなり核心に触れてきましたけれども、ほかの皆さんはいかがですか。

実は、阿南、阿智を見学させていただいたとき思いましたのは、これはコスト的な側面から考えますと、かなり無理があるなというふうに思っておりましたが、今の岡庭委員のご発言にも関連しますが、地元の人材を育てるんだというような認識で話が強く出されました。

さすれば、私は、生徒数がかなり減っても、その学校はそのまま『最終答申』の報告書から見れば、ミニマムの世界ですね。2クラスというようなことがあっても、本当にそこを愛する子どもたちを育てるということで、かつなかなか都市型の高校には利便性の問題で行けないということを含めたり、またお聞きする中では、生徒の皆さんの中の約1割は授業料免除だそうです。そういうような状況も勘案して考えていきますと、このところはちょっと別に扱い、結論は付けていけばいいのではないかと思います。魅力のところは妥協しても、こういう世界でこの学校は魅力があるんだというように、語りを入れていくより仕方がないのではないかなと思います。



そこで話が発展して、先ほどの熊谷委員の話なのですが、やはり全体としてどうだと。こういう話は、どちらかというと都市型のところに特化していくというふうに、整理をしていこうかなと考えていた理由です。

同時に迷うことですが、ここに第三者の皆さんや、プレスの皆さんがいらっしゃいます。今ご発言になった内容とか資料について、皆さんの前でやっていいものかどうかという悩みは、実は委員長としては持っております。これは会の最後のところで、また皆さんのご意見を拝聴したいと思いますが、その分を合わせて、そういう話を申し上げておきたいと思います。

（熊谷委員）

それぞれの委員さんの立場からお話が出ましたが、私も見ました阿智高、阿南高の話が出ましたが、現在の高校というのは、北原先生が言った「進学校」なり、「習熟途上校」なり、地域校、職業科。それぞれの高校がそれぞれ多面的な顔を持っていると思うんですね。

地域校にしましても、今委員長さんがおっしゃったように、地域の人材を育てるという部分もやはり2割、3割持っていると思います。

これは逆に岡庭委員さんが言われたように、飯田の街の中から山を越えて来ているという側面も持っているわけでありまして、交通の便が悪いから通学ができないと言いますが、飯田・下伊那で、例えば阿智高でいけばほぼ飯田の街からということで、実際には相当広範囲に通学しているわけですね。阿南高にしても交通の便がありますので飯田の街から通学しているという現状もあります。

確かに、例えば遠山は谷だから阿南高へしか行けないよという生徒もいますが、逆に言うと飯田の街からも行っているという、いろんな多面というものを持っている。

職業高校についてもそうだと思うんですね。今、岡庭さんがおっしゃったように、習熟うんぬんという部分で、取りあえず近くなので職業高校に行っているという生徒もいるだろうけれども、より農業というものを切り口にして勉強したいという生徒も当然2割、3割はいるわけです。それで農業高校を卒業した生徒が農業に就かないから存在感がないかという、私はそうではないというように思っているわけです。現実には、今はもう職業高校といえども、7割から8割の進学率になってしまっているわけですから、そのことをとらえて職業高校の存在価値がないんだという、そうではないというふうに思っているわけです。

そういう意味でいきますと、今、高校というのは多面的な顔を持ってきているわけなので、その高校をどうするかというのは、私は、いろんな立場で議論をされてもいいと思うのですが、ただ、今回の高校改革プランの委員会の中で、あまり高校教育の本質議論のような議論がされることが、この委員会に期待されているのかどうかということが、私は大変気になっているところでございまして、その辺のところも議論していただければなというように思います。

（池上委員長）

はい、ありがとうございました。

( 藤本委員 )

地域高校の問題が今議論になっていますが、地域高校の費用対効果がちょっと出ましたけれども、例えば、横の関委員さんのおられる清陵高校、清陵高校の生徒が、県の税金を使って、じゃあ地元に戻ってくる割合は何パーセントなのでしょう。

例えば、阿智高校、阿南高校自身が、先ほど言われたように、本当に地域に貢献している、私は安曇野に住んでいるのですが、我々の周りで雪かきをしてくれるのは、梓川高校の生徒なんですよ。だから、私は、あまり費用効果論で地域高校はお金がかかっている、というのは非常に気になるんですね。進学校の生徒が、若干はいるでしょうが、どれほど長野県に戻ってくるのか。

かつて、教育課程審議会の会長であった三浦朱門氏は、もう生徒に平等に学力をつける時代は終わったんだ、特定のエリートに対して限られたお金を注ぐんだ、能力のない子には実直な精神だけ養ってもらえばいいんだと発言されました。今の教育制度そのものがそういう方向になっている。

私が学校で授業をしておりますと、もう小学校段階、中学校段階から、習熟度別が入っているわけですね。さらに中学校で選択が入っているわけです。例えば技術家庭科あたりは、選択があるわけですね。習熟度が小学校や中学校から入ってくると、同じ教室の生徒さえも、もうばらばらになる。学校だけではなくて、同じ教室の中でさえ、高校はそういう状況なんですよ。

私は、「魅力づくり」のところで、ハード面の検討も、と時々発言したんですけれども、地域高校については、私は中高連携、連携型というのですか、3つほどタイプがありますけれども、個人的にはそのようなものも検討に値するのではないかという気がしております。そうすれば、さらに地域高校が「魅力づくり」ができるし、中学校との連携を深めて、クラブ活動、それから教科指導においてもお互いの先生方が協力するなりして、さらに「魅力づくり」ができるのではないかと、そんなハード的な議論も、地域高校の場合はやっていたらいいかと思います。

( 池上委員長 )

今の中高連携というお話ですが、確かに『最終報告書』に少し出ていたような気がします。これをもう少し具体的にいうと、どういうことなのでしょう。

( 藤本委員 )

事務局のほうがいいのではないですか。3つほどのタイプがありますが。

( 吉江高校教育課長 )

ご説明申し上げます。中高一貫校の中でご説明した経過があるのですが、ひとつとしまして中高一貫校は、先ほど藤本委員さんからもお話がございましたように3形態あるわけですが、そのうちの1形態に県立高校と近隣の市町村立中学校との連携ということによって、生徒の交流とか、あるいは教職員の兼務のような形での交流等を含めて活性化を図るというような形態がございまして、それを藤本委員さんは想定されてご発言されたということかと考えております。

(池上委員長)

ありがとうございました。  
ほかにございますか。

(小口委員)

私は、残念ながら、先ほど話に出ております阿智高校とか阿南高校の見学はできませんでしたが、先ほどの話の中でお伺いしていると、阿南あるいは阿智高校にも、結構飯田のほうから長時間かけて通学しているという事情を伺うについても、あるいは、私の娘がちょうど中学ですが、1時間ぐらい電車で通学していたという事情を考えても、あるいは長野県が日本の中でも、非常に自動車の保有台数が多いということを考えても、地域に高校があってその地域しか行けないんだという事情は、もうすでに長野県の中ではだいぶ少なくなっているのではないかと思います。

もう広域的に、親は自動車を使って送り迎えができるし、電車も交通機関も結構あるということを見ると、むしろ地域校あるいは普通高校というよりも、「魅力がある」というふうにつながりますけれども、どのような「魅力がある」か、あるいは特色があるかということで生徒がやはり動くんだと思うんですね。ですから、地域校を残せというよりも、どういう「魅力のある学校」をつくるというのが、私は最初にくるべきものではないかと思います。

先ほど地域に戻って地域の役割を果たすという話がありましたが、例えば諏訪地域も製造業が密集しておりますが、私ども製造業の課題が、今製造業はグローバルな競争の中で戦っておりますので、海外にも工場がどんどん出ている。そうすると、海外との競争になる。そうしたときに、地域を、どのように開発型の地域にしようかということを考えるんですね。

ところが、その開発型地域にするのに、開発者を呼びたい。ところが、例えば20歳代、30歳代の非常に働き盛りの開発者は、ある程度の教育レベルが高い地域でないと来たがらないのです。ですから、そこに工業がある地域の学校については、やはりある程度のレベルを求めたいわけです。そうしないと、企業の存続すら難しいから、今度は働く道がないという話になってしまっていて、やはりどういう地域をつくる、その地域をつくるためにどのように学校があるべきだと、その特色ある高校があるべきだというような方向に持っていったほうが本筋ではないかなと私は思います。

(池上委員長)

そのとおりだと私も思います。ただ申し上げておきたいのは、しかしながらやはり通学できないという皆さんがあるということもまた事実です。その中で、交通費の問題とか宿舍の問題とかいろいろ議論がありまして、同時に申し上げたように、いわゆる経済的に問題のある皆さんも結構たくさんおいでになるということがございました。

「魅力ある高校」という世界では、こういう議論が始まりましたのでこういうことが登場したのしょうからやむを得ないと思うのですが、では、校長先生と地域の皆さんがどのくらい学校を愛して、その学校に対してどのように自分の意見を入れたり、また力を出してきたかというような側面でインタビューをさせていただいても、これは大変難しい。

今起きてきた話だから、今までは本当はあまりやっていなかったのですということに近いご発言だったというふうには思いますので、今の小口委員のご発言は、これからの話をどうするかということになるのだらうというふうに思います。

ほかにございますか。

(川島委員)

私も阿智、阿南の見学は都合でできなかったわけですが、「魅力づくり」ないし、高校数の削減という問題から見ると、やはり委員長さんがおっしゃるように、少なくとも阿智、阿南につきましては、現状でそれがなくなれば当然下宿しなければならない生徒が出てきます。

小口委員さんは車や電車でおっしゃるのですが、それが困難な状況も私も個人的にも知っておりますので、こことしましては高校数削減的な問題としては、費用対効果の面では大きな問題があるとは思いますが、消極的な意味で申し訳ないのですが、存続はやむを得ないという形で地域校は考えざるを得ないのではないかと思います。

今、この「魅力づくり」というのは根源的な問題が出ておりますが、熊谷委員さんのおっしゃるように、やはりここの委員会で作るのは荷が重いですし、現状の阿智、阿南あたりは3クラスという形で募集定員が維持されておりますが、これは例えば2クラスにならないように「今後よろしく願いますよ」というレベルで引き取っていただくとして、少なくとも阿智、阿南の存続は「やむを得ない」というような消極的な形で引き留めていただければと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

これは、それぞれの皆さんがぜひご意見をいただきたいと思っています。

小坂委員、いかがですか。

(小坂委員)

地域高校の議論に入る前に、やはりこの委員会として、教育委員会が出したたたき台をどうするのかという、今日もたくさん陳情が出ていますね。

私どもの市長会では、やはりこれは拙速にし過ぎたと。もしたたき台であれば、もっといろんなたたき台ができたのではないかとということで、先般教育委員長さんのほうへ、市長会としては、これを白紙撤回していただきたいというご意見を申し上げたわけでございます。

従って、さっきも下伊那の皆さんからは地域へというふうなお話がございましたけれども、私は、やはりこのたたき台をどう扱うかを決めておかないと、どうしてもそこへ行ってひっかかってしまう面がありますし、それから、さっきも委員長さんが、具体的に私どもが名前を出せば、非常にまた、今日も傍聴の皆さんもマスコミの皆さんも大勢いるわけです。そういった形の中で、個人に対するそういう働きかけもあるということですから、地域高校をどうするかという問題よりも、たたき台を、たまたまこの第三通学区では地域高校はどこも対象になっていないんですね。けれども世間一般からいうと、地域高校を何

とかするのではないのというおおよそのそういう意見も、皆さん漠然とした形の中では持っていたというように思うんですね。

ぜひその点を、今日と言わなくても、この県教委の出したたたき台をこの委員会としてどう扱うか。私は、白紙撤回、言わなければ棚上げでこの改革プランをやっていただきたいなというように思うわけです。議論が戻ってすみません。

（池上委員長）

いやいや、これから行こうと思いました。

岡庭委員は、いかがですか。

（岡庭委員）

私も最初から申し上げているように、今、北原さんの話について、私もこのことでちょっと発言させてもらったのは、やはりこれらの問題について長野県教育委員会というのはどのように考えているのかということが見えないんですね。こういう現実をどうするのか。現実を帯びている問題について、どういう形で長野教育委員会と高等学校教育をこういう形で進めていきたいというように考えているのかと。あるいは、職業高校についてはどう考えているのか。それらが全然見えないんです。見えないのにたたき台だけが出てきたということです。

それともうひとつは、総合学科高校について、実は総合学科高校については、塩尻志学館高校について評価が高いと言われていますけれども、少なくとも高等学校の校長先生のレベルでも総合学科高校の評価が分かれているというように聞いているんですね。高校の先生たちの間でも総合学科高校に対する評価が分かれているということから考えると、本当に、では総合学科高校がオールマイティのように書かれていますが、それでいいのかどうかという問題についてもよく分からない。

それから、多部制・単位制高校でありますけれども、この問題は、例えば生徒の居場所づくりというようなことが書かれているわけですが、実際はやはり高等学校そのものを居場所というような形で位置付けるということが、まともなのかどうかということも含めて、中学校の教育課程の中で、分数やいろいろなことがよく理解できずに卒業した子どもたちを、どういう形で教育していくのかという問題は、高等学校教育のところで解決しようとするのが、本当にいいのかどうかという議論も出てくると私は思っているのです。

その辺の点が、私もずっと高校改革プランのことで考えてきましたが、全然分からないこと、みんなが共通認識として持たなくてはならないことが全然持てずに、高校改革のプランだけ、削減計画だけがたたき台で出されてきているということで、戸惑ってギブアップというのが私自身の本当の気持ちであります。

ですから、ここのところをどのようにお考えになるのか、もう一度やはり県教育委員会の考えをお聞きしたいなと私は思っているわけですが。

（池上委員長）

ご意見はございますか。

(吉江高校教育課長)

今、岡庭委員さんからお話がありました件で申し上げますと、基本的に私どもは前々から申し上げていることなのですが、高等学校を非常に生徒さんが活気あふれる形で来ていただいているような形態で、ぜひ構成したいというのが大前提です。ですから、そういう意味では、私ども 89 の県立高校につきまして、同じスタンスで臨んでおります。

しかしながら県立高校の場合には、ご案内のように 97% というような進学率があるものの、当然ながら選抜試験というものがあります。選抜試験によるもの、それと生徒の移動自体は、先ほど来お話が出ていますように、ある程度以上広域化しております。現実問題としてそれはやむを得ないことだと思っています。当然今のブロックに限らず前の旧 12 通学区でありまして、その地域高校という意味ではございませんで、その所在する学校に生徒がすべて行かないというのが県立高校、いわゆる義務教育との違いもございます。

当然ながら、それがひとつの流れの中で違いとして現れている。それが結果的には、私どもはある意味で、北原委員さんがこのようにおまとめいただきましたような形の学校の区分けというようなものは、当然ながら申し上げてはおりませんけれども、それがひとつの動きであるということは、まずご理解いただきたいと思っています。

その中で、例えばどうしていくかということであれば、私どもはこの委員会にお願いしているのは 4 項目であります。ですから、ひとつの項目とすれば、再編整備をということをお願いしてあると同時に、もうひとつは、当然そういうような形で対象になる学校、あるいはならない学校。ならない学校につきましては、今後どうしていくのがいいのかということも議論していただきたいと。その中で、当然「魅力づくり」という項目も出てまいりまして、そうしますと、ある意味こういうようなことで、北原委員からもおまとめいただいたような位置付けも含めて、例えば職業高校は、今後この第 3 通学区で、今あるものがどのような形でやっていくのがいいのかというような議論もお願いできればというような感じで考えているということでご理解いただきたいと思います。

(岡庭委員)

ですから、丸投げではなしにたたき台をつくった、要するに理論的な観点というのが明確ではないのではないかと。長野県の職業高校をどのようにしていきたいのかと、あるいは工業高校はどういう形で考えていきたいのかという中で、例えば、箕輪工業の問題や駒ヶ根工業の問題が出ましたと。職業高校をどうしたらいいかという観点の中で、じゃあ下伊那農業高校と長姫高校の問題が出ましたと。あるいは今、北原さんが出されたようなことは、実は私は暗黙の中であるけれども、この問題も、私は中途退学の問題とか、子どもの言ってみれば高校教育についていけないという子どもが半分以上あるとかという、そういういろんな問題と深く絡んでいる。

この問題を、ではどういう形で県教育委員会は考えて、多部制・単位制の問題を考えたのか、総合学科の問題を考えたのかということが、ちょっと見えないというところに議論ができにくいというところがあります。

もう財政問題は言わないという話は、理解はできませんけれどもよく分かりました。その点が、ですから我々が、じゃあ飯田・下伊那で、南信広域連合で部会設置のことがなかなか難しかったということですから、単独でもちょっと考えてみるかということで、今い

ろいろやっているわけです。その中でいろんな対案を出したらどうかという形で我々も考えているのですが、そここのところがしっかり見えないと、なかなか検討しようがないと思います。

ですから、たたき台そのものの何を考えて、その少人数の問題等いろいろなことについて考えたということは分かるわけですが、もう少し突っ込んだところで、ここの学校とここの学校をこのようにしたところが、こういう実は職業学校をこのようにしたいんだと、長野県の工業教育をこうしたいんだということが見えないということなんですから。すみませんが。

（吉江高校教育課長）

ちょっとほかの委員会の例を出していいのかどうかは別といたしまして、小坂委員さんからは例の検討材料につきましてお話をいただきましたし、岡庭委員さんからも、今このようなご意見をいただいたのですが、実は、第一推進委員会、北信でございます。北信の推進委員会では、私どものほうで提案した内容につきまして、具体的には再編整備の候補案につきまして、ある程度詳細な内容を聞いた上で考えていきたいというようなお話が出ております。

それと第四推進委員会、中信におきましては、まず基本的な私どもが候補案をつくるにあたってのひとつのプロセスをまず検証したいと。そのプロセスを検証した上で、恐らくは今後第一推進委員会と同様な方向で、では具体的な候補案について個々に話を掘り下げていきたいというようなお話が出ております。

それで、ある意味、岡庭委員さんからおっしゃられた内容というのは、そこら辺に起因する面があるかと思しますので、そこら辺は今後のこちらのほうの委員会の動きの中で、どのような形で議論を進めていくかというご議論をいただいた中でお決めいただければと思っています。

ただ一点申し上げたい点は、総合学科で申し上げますと、総合学科高校について、岡庭委員がおっしゃられたように確かにそれぞれご意見はあろうかと思えます。しかしながら私どもは、今回の平成 12 年に設置いたしました塩尻志学館高校、この高校におきましては、成功例だと考えております。

全国的には 259、約 260 が現在建設中も含めて総合学科高校が用意されているわけですが、そのようなものの中で長野県県立 1 校を総合学科ということにして、非常にいい運営、またいい教育をしていると考えておりまして、そうであれば、なかなか、十分塩尻という地であれば生徒さんに進学いただくにあたりまして、いわゆる通学の利便性を考えた場合に不十分でございますので、これをそれぞれの地域に設置をしたいと考えております。

ただ、しかしながら、2 校も 3 校も各地域ごとにとすることが、果たしていいのかという議論がある中で、まずは 1 校ずつお願いしたいと考えています。

それから多部制・単位制につきまして申し上げますと、これはある意味、多部制・単位制がイコール今まで義務教育で十分な教育を受けられなかった生徒さんのためだけのものという想定はしておりません。ある意味、私どもが今回の『報告書』の中でいただいているものの中に、向学心育成高校というものがございます。

向学心育成高校というのは、その言葉がよくないということで、反面批判を受けた内容

ではありますが、十分に基礎学力をつけていただくという意味で、別に多部制・単位制という言葉に限らず、今申し上げた向学心育成高校的なイメージを取り入れたような学校もあっていいのではないかなというようにも考えている次第でございますので、合わせてご検討をいただければと思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。

それはまさに本論の世界でございますが、一通りお話を伺ってから次にいきたいと思えます。よろしくお願いします。

（笠原副委員長）

地域高校の問題でいいですか。

諏訪、下伊那、上伊那、それぞれに地域校があるわけですが、私もこの間、委員長と一緒に阿智、阿南を見学させていただきました。それぞれの地区の地域校の実情がだいぶ違うなという受け止めです。特に、阿智から阿南へ移動をしてみました。これは阿智と阿南の学校、中学がどうしても一緒の学校からどちらかの学校へ行けるというような実情ではないという状況であり、飯田のほうから入って来ている生徒についても、同じ中学から阿智へも阿南へも行けるというような状況ではないということでした。

ですから、そういった点でも、諏訪や上伊那と、地域高校といってもちょっと状況が違うのかなと思います。

地域高校というのはどの学校も存在意義があるわけですし、創立当時から、それぞれの地域がその地域の人材を育てるというような目的で、たぶんできたんだろうと思いますけれども、そのころとだいぶ状況は変わっているにしても、そういう役割はやはりいまだにあるのではないかなというように思います。

そういう意味で、できるだけ残せる地域校は残していくことによって、その学校にまたさらに努力をしていただき、地域のために役立つ学校という形になっていけるのが一番いいのではないかなと思います。

しかし、都市部のほうから、習熟度の低い子どもたちも来るわけですので、やはり都市部の学校に負けないようなそういった学習の面での努力というのも、地域校はこれからもやっていかなければいけないのではないかなというように感じます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

では小林委員、ひとつどうぞお願いします。

（小林委員）

ちょっと正直言いまして、会の進め方に、私は非常に不満があります。

今まで、「魅力ある学校づくり」を視点にということで進めてきたと思います。いろいろな意見があったけれど、取りあえずこれで考えて行きましょうということでした。そして資料を全高校から出していただきましたね。そして、実際に学校も見ましょうというところ



で、その流れで、今日も私は議論がされるのかなと思ったら、何か視点がまた違ってきてしまっているので、ぜひ視点をそれに戻していただきたいと思っているのです。

そのために私は資料をつくってききましたので、お願いしたわけです。

先ほど共通視点がないということをおっしゃった。県はどういう意図でたたき台をつかったのかと。これは再三出ているけれども、県ではっきり答えてくれていない。ならば、我々がどういう視点で考えていくかということをやらざるを得ないと思うんですよ。

そこで、せっかく「魅力ある学校づくり」ということを分析してきたので、そこから、いったい再編がどの部分で必要なのか、必要ないのかという議論をしていったときに、地域高校のこともそれから北原先生のおっしゃった「習熟途上」のことも含めて、ある程度共通意識で検討できるのではないかなという意味で、ちょっと発表させていただきます。

せっかくですので全学校が出してくれた上記に関する資料を、私なりに分析してみました。「魅力ある学校づくり」の一番根幹をなすものはいろいろありますが、私は、やはり生徒の学習意欲の向上のための施策と考えますので、それがどうなっているかということかなということで、教育課程と学習指導に絞って分析してみました。これは1学科で挙げた施策はすべて網羅してありますので、学校数とは一致しておりません。定時制は1学科としてカウントしてあります。

そこで、まず教育課程で見ますと、圧倒的に多いのが「コース制または類型化」。それから「学校設定科目の設置」。これは特色ある学校づくりに合わせたことだと思います。それから「選択教科設定の拡大」。この3つが一番大きいかなと思います。

それから学習指導のほうで見ますと、「補習の実施」。これはかなりの学校で行われている。それから「習熟度別学習の導入」もそうです。それから、少し前に問題になった少人数学級についてはもちろん設置できないわけですが、「少人数学習の導入」はかなり行われていると。それから、「ドリル、小テストの実施」。あとは、ばらばらであります、こんな状況であります。

それで、私はここから見たときに、各校とも「魅力ある学校づくり」で大変こうやって苦労されているなということはおよく分かってきました。

課題として、ここからが大事なのですが、現状のままの教員配置の場合、教員の持ち時間のゆとりがないと推進が難しくないかと感じました。具体的にいうと、1の を除いたすべて。それから3の 、 、 。つまりこれは、ある程度持ち時間が、例えば高校はこの前平均17時間というようなお話をお聞きしましたが、例えば少人数学習を導入するとすれば、加配がないとすれば、結局先生方の持ち時間を増やしてやらざるを得ないが、ある程度持ち時間にゆとりがないと非常に難しいのではないかなと。それが1つ目です。

それから、コースの数が学級数を上回る状況になっている。これも地域高校に関係するかなと思うのですが、上記の施策が非常に心配であるということ。それから、全部見て私が非常に気にかかったのは、授業の研究をチームで実施している例がひとつもない。どうして高校は授業の研究をやらないのかと。「魅力ある学校づくり」の一番の根本は、私は授業かと思うんですがね。ここが非常に気になりました。

今後の検討方向として、先ほどの再編と絡めたときに、こうやって各学校で本当に一生懸命取り組んでいる。それをさらに推進していくことと課題のクリアのために、再編しないのでできること、再編しない限り推進困難なことはいったい何なのか。その辺によって、

我々が今後議論を深めていったらどうかと。

それから、例えば2や3の項目を推進するためには、生徒数に比べて教員数の確保が現状の努力で可能なのかどうか。可能でないとすれば、どんな方策が必要なのか。これが、私は、結局財政問題は前から触れているように9割が人件費だということになったときに、そのことは頭に置いて、いったいどのようにしていくのか。金がないから教員を削っていつてしまったら「魅力ある学校づくり」ができないのか、いやこの部分は削っても大丈夫なのか。その辺が、今後検討が必要かなと思います。

それから3つ目は、それでは多部制・単位制、総合学科というのは、いったいこの2と3とどこがつながっていくかと。そのところをもう少し明らかにしていくべきかなということ。

最後に、どの学校でも一生懸命に書いてくれたわけですが、なかなか課題を明確にしている学校、学科が非常に少ない。これはやむを得ないと思います。状況が状況ですから、いいことは書けるけれどもね、学校の恥部のようなことはなかなか書きにくいのではないかと思います。校名を伏せても、結局、2や3の課題を本当に解決していくには、どういう課題があって、どういうことが必要なのかということも、再編にかかわってくるのかなということなので、私は、せっかく「魅力ある学校づくり」の検討をずっと続けてきたので、これを発展させていくことが必要かなと思います。

以上です。

（池上委員長）

はい、ありがとうございます。

かなり踏み込んだ話で、率直に申し上げて委員長に分からないところがたくさんございますので、また次のステップでこの議論は、冒頭の進め方の問題でございますけれども、これを終わらせたらこっちの方向に入って行かしていただきたいと思います。ありがとうございました。

それでは、小口委員、恐れ入ります。

（小口委員）

地域性の話については、私は先ほども少し言いましたが、あまり地域性というのは考えなくて、むしろ特色あるというものが大事だろうと思います。というのは、地域性はあっても、特色ある学校ということは、ひとつには地域性があるという特色があるという高校もあっていいと思うのですが、やはり地域がなくなるとは地域高校の意味がないので、どのように地域として特色ある地域をつくって、そしてそのためにはどういう高校が必要だというアプローチが必要だというように私は思っております。

さて、先ほども小林さんのほうから「魅力ある学校」の話がありましたが、先日の学校を見学してみても、どちらかというと進学校のほうというのは、ある程度1クラスは大きくてもいいなという雰囲気がしましたね。松川高校は1つのクラスを3つに分けて授業をしておりましたし、それに比べて飯田高校は大人数でやっていたように思いますが、たぶん、そんなに実力の差はないのかなというように思いましたが。

そういう意味では、例えば私どもは企業活動をしておりますと、この小林さんの話につ

いては、どちらかという学習意欲ということで学習という視点からですが、もうひとつクラブ活動と言いましょか、高校を生き生きと生きたかという部分も非常に重要に思います。

それで企業でいきますと、先ほど開発の話がありましたが、そういう優秀な企業を引っ張っていくような、そういう人材は必要ですが、それだけではなくて、その周りの例えば営業ですとか、機械を実際に動かすという人も非常に重要なわけでありまして、そういう人物はどういうところから生まれるかということ、ただ単に学習だけではなくて、やはり非常にスポーツを熱心にやったとか、クラブ活動を非常にやったとかという人間のほうが、どちらかという人としてなかなかいいやつだということが、私は言えるのではないかと感じております。

そういう意味では、北原先生は「習熟途上校」というような表現をされていましたが、例えば「習熟途上校」では、もっとクラブ活動とか実体験とかいうものを取り入れながら、その後の社会に出たときに非常にいい人間となるような、そんな人材の育成をしていただければなというように思います。

もちろん、残念ながら進学校に入れなかったという子もいるでしょうが、問題は、そのあと気付いたときにまた復帰できるという環境を整えることは大事だと思っておりますので、そんな環境もつくりながら、若いときはあまり勉強という気はしなかったけれども、しばらくたって、例えばクラブ活動を一生懸命やったら、どうも頭脳プレーが必要だというようになってきたらまた入れるとか、そのようなケースもあるでしょうから、そういうような復帰できる環境を整えながら、そういう進学校と習熟途上校と分けたならば、習熟途上校はどちらかというということをもっとやるという、そんなこともいかがでしょうかというように思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは熊谷委員、恐れ入ります。

(熊谷委員)

この北原先生のときも言わせていただきましたが、実は飯田・下伊那というのはご承知のとおりだと思いますが、香川県と同じぐらいの面積がございまして、非常に広域な地域に高校も8校が配置されているわけでありまして、ある意味でいうと松川高校も地域校というような位置付けになるわけですね。

飯田・下伊那というのは、北部・中部・西部・南部というような地勢として分けられる。そこに北部に松川があり、西部に阿智があり、南部に阿南高があると。このようなことできているわけですし、またその中でも歴史的にいろんな意味で高校の配置もされてきているということもあるわけですし、従いまして繰り返しになるわけですが、ただ地域高校だから残す、残さないということではなくて、やはり飯田・下伊那として、どういう高校の配置をしなければならないかという議論をやらざるを得ないところに来ているのではないかなというように思うわけです。

地域校だから、聖域として取りあえず全体数を残しましょうという、やはり聖域を設け

ずに検討しなければいけないところに来ているのかなというのが、正直な私の気持ちでして、岡庭委員さんに怒られるかもしれませんが、そういう議論を、飯田・下伊那の地域でさせていただきたいというのが部会設置の思いであります。

その中で、実は先日県の教育委員会の事務局の方と話したら、じゃあ部会設置したときに、飯田・下伊那の8つを7にできるのですかと。8校を7校に減らすということで、では部会設置をするんですかという話もあったのですが、そういうことも含めて、トータルとして議論をしていかないと、単純にじゃあ阿南高校をどうする、阿智高校をどうする、これは地域高校だから残しましょうと。では専門高校をどうする、専門教育も必要だから残しましょうという議論ではすまないというところに来ているというのが、変な話、高校改革のこの委員会をつくらざるを得なかった背景にあると思うので、飯田・下伊那としては、その辺で、そういった地域事情を、また地域エゴだという発言もありましたが、まさに地域エゴだと思うんですね。

飯田・下伊那という地域で、高校をどのように配置するのかという、まさに地域ナショナリズムで議論せざるを得ないので、そこで、上伊那、諏訪の皆さんのお知恵拝借という話にはならないと思いますので、ぜひそういった部分も含めて、地域校をどうする、専門高校はどうする、じゃあ学校数はどうなるんだという議論も含めて部会なりで検討をさせていただいて、それをこの委員会の中で反映していくというような手法を持ってもらいたいと思いますし、間違いなく、それでいきますと例えば諏訪と飯田を見てもらいますと、諏訪には地域高で富士見があると言いましたけれども、実際に富士見高校というのはそんなに地域校というイメージがないので、全然違うわけなので、同じ土俵の議論にならないというように思っていますので、ぜひ、くどいようですが部会のことについてお願いしたいというように思います。

それと、もう1点、先ほど吉江課長からいい話ができましたけれども、他の第一、第二、第四推進委員会でどういう議論がされているのかというのを、ぜひ、要旨で結構でございますので、参考のためにも、まあ議事録を公開すると言われて、私のところにもこの議事録や何やらが来ましたが、とても遅いので、現時点での、先ほども第一推進委員会の議論が出ましたが、第二、第四推進委員会でどういう議論がされているのかというのが、参考までに出していただきませんと、何でこの第三推進委員会だけとんでもない話をしていてもしようがないと思うので、ぜひその辺をお願いしたいと思っております。

（池上委員長）

ありがとうございました。

その点はいかがですか。

（吉江高校教育課長）

ご予定いただければ、例えば各回の冒頭あたりで、それぞれ、例えば今回この5回目がこちらの第三推進委員会が最後になろうかと思いますので、それまでの間にほかの委員会ではどんな議論がされたかということはお伝えしたいと思っております。

それで、ちょっと付け加えさせていただきますと、先ほど第一推進委員会と第四推進委員会の様子はお伝えいたしました。それで、第二推進委員会につきましては、第一推進委

員会も第四推進委員会も同じなんですが、一般的には現在は、いわゆる総合学科高校を設置するについて、総合学科高校の必要性がうんぬんとか、あるいは多部制・単位制高校を設置するにつきまして、多部制・単位制の必要性などというような議論をほかの3つの委員会は主にされています。

それをしている中で、第一推進委員会は、先ほど申し上げましたように、今回は私どもが出しました候補案につきまして、具体的にいろいろとまた説明を聞きたいと、もうちょっと具体的な話を聞いて、それで考えていきたいというような方向になっていますし、それから第四推進委員会のほうは、先ほど申し上げましたように、候補案の策定にあたってのまずはひとつのプロセスを聞きたいと。プロセスを聞いた上で、恐らくは第一推進委員会と同じような方向になるのかなと考えております。それとまた、第二推進委員会につきましては、現在は、具体的に例えば総合学科とか、あるいは多部制の議論をした段階にとどまっているというような状況でございます。

(池上委員長)

はい、ありがとうございました。

では、提出が可能だということでご理解をいただきたいと思います。

では北原委員、恐れ入ります。

(北原曜委員)

まず今の話なんですが、先ほどお二方から県教委の考え方を示してほしいということであったのですが、私は別に県教委の肩を持つわけではありませんけれども、あれはひとつの案として、たたき台として我々に投げられたものということで、我々はそれを違った形で返すのもよし、そのままでよし。そういうことが任されているわけで、例えば総合学科高校を、例えばこの第3通学区に2校設けようが、どういう要望を出そうが、多部制はつくらないということにしようが、その辺は、我々の裁量にある程度任されているのではないかと思います。ですから、結構自由闊達(かつたつ)に議論していけばいいのではないかと考えています。

それから地域高校の話ですが、地域高校というのは、最初のころ輪切りということがありました。が、学力によるランク分けというようなものとは違って、もともと地域の生徒を集めて学習させるというところですから、習熟度に差があるわけですね。このように習熟度に大きな差があるところでありますが、現在は都市部の高校、いわゆる「習熟途上校」、「進学校」も含めて、ランク分けされてしまっているということになります。

本来あるべき地域高校というのは、そうではなくていろいろな習熟度に差がある生徒を、地域の特色を生かしたカリキュラムを取り入れて、貢献するような生徒を育成していくということにあると思います。進学校、習熟途上校とは別の時限の学校であるべきであろうと思うのですが、現状ではそうはなっていないということだと思います。

では、どうしたら魅力ある地域高校にしたらいいのかということですが、やはりこれはちょっと共通の悩みが確かに「習熟途上校」とあって、学力にすごく差がある。ですから習熟度別にきちんと教えていかなければいけないということが、ひとつの課せられた任務ということになると思います。

魅力ある地域高校なのですが、そういうことをベースにして地域の特色を生かしたカリキュラムを編成していくということに尽きるのではないかと思います。ちょっと言葉足らずで申し訳ありませんが、以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

では、恐れ入ります。

(川島委員)

地域高校の問題につきましては先ほど申し上げたとおり、第9通学区に限って言えば、やはり残さざるを得ないのかなという認識を持っております。

それから、幾つか議論が出てまいりましたが、県教委で出された案につきましては、やはり私も、ひとつの案という理解で構わないのではないかと思います。従って、対案提示等の余地は十分にあるという性格付けのものであるということで、よろしいのではないかと思います。

それで、その対案づくりのところで、やはり先ほどから熊谷委員からも出ておりますように、飯田・下伊那旧第9通学区につきましては、部会設置をしていただきたいという議論がございます。私も、確かにそれは必要だとは感じております。

時間的ないし制度的なもので困難であるということであれば、場合によっては県教委の皆さんが、こちらから要請した場合にその地域に出向いて、我々に示していただいた資料などを説明していただくような、そういった機会を、こちらが求めたときに応じていただけるのか、その点はやはり部会設置と絡めて、お考えをお聞きしておきたいというように思っております。

それと、冒頭の財政問題うんぬんで、高校数を削減したときに、どれだけの費用削減効果があるのかということまで、県教委の方で具体的な数字をお持ちでないといいますが、責任ある数字が示せないというようなことが出てまいりましたが、前回飯田高校で行われたときの資料8の、「再編整備に係るシミュレーション」を示していただきましたが、こういった数字を拝見しますと、まだ実態がこのシミュレーションでも出ていないのかなという気が、正直しております。

現状の、A高校ないしB高校の教員数、それから経常コスト、学校運営費用を除いた分が全て人件費だということをみますと、大体高校の先生1人当たりの人権費というのは、年間850万円くらいなのかなという試算が出るのですね。

ここではA高校とB高校を統合して、C高校、1学年何学級相当のものをつくるという数字を示していただいているのですが、確か改革プランでは、新設校は6学級を基準とするというような形で示されていたと認識しておりますし、やはりまだまだ、削減額、差額というものは、実態を示していないという認識を持っております。

私のほうで、学校要覧等を拝見して試算したところだと、たたき台といいますが県教委の案を基に考えてみますと、飯田長姫高校が、現状は専任で56人の先生方がいらっしゃいます。下伊那農業高校が、非常勤を除きますと58人ということでございます。塩尻志学館高校の学校要覧も拝見いたしました。正規職員が今6学級規模で67人ということですから

ので、56 人と 58 人を足して、統合して 67 人の高校をつくると、差として 47 人高校の先生が減ると。47 人に 850 万円を掛けると、3 億 9,950 万円。だいたい 4 億円減るのだと。それで、この「再編整備のシミュレーション」の資料 8 を見ますと、2 つの高校を統合したときの学校運営費用が、大体 4,000 万円減るということです。

ですから、私の個人的な試算ですと、現在出ている飯田長姫高校と下伊那農業高校を統合して、6 学級規模の総合学科高校をつくるとなると、大体年間 4 億 4,000 万円くらいの削減が可能なのかなというように、私のほうでは試算しているのですが、そういったあたりの算数が間違っているというのであれば、お示しいただきたいし、算数としてそのような数字が成り立つのであれば、ある程度そういった実態に合った数字を、独り歩きすることよりも、やはり対案づくりだなんどの面でも必要となりと思いますので、いろいろな形態を考えてシミュレーションを示していただけると、私としては助かるなというように思っています。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

今の部会の話であります、やがて進めてまいりましたときに、その地域をどうするかという話は当然議論としてはあるのだろーと思しますので、その時点でまた検討させていただくということになると思います。

それから、財政のシミュレーションにつきましては、当たらずとも遠からずということ、を、暗黙で理解していただければ、それはそれで我々が効果を上げることになるかと思えます。我々が逆に開陳をして、「どうですか」と言ったほうが、話が早いんじゃないかなと思っております。またこれは当然のことながら、いろいろな議論にしていきたいと思います。

では丸茂委員、恐れ入ります。

(丸茂委員)

先ず、部会設置についてでございますが、諏訪地区では部会設置はできないと思っております。

部会を構成するにあたって誰が音頭をとるのか、事務局の設置をどうするのかなど、先行きに時間がかかりすぎますので、私どもではできないと、私自身は考えております。例えば部会を、3 地域で個々に設置することが認められなくても、広く意見を吸い上げて、この委員会に出席するという形で納得はできないものかと思ってきました。

また、独自に、すぐに部会を設置せよというようにゴーサインが出たときに、熊谷委員の地区では、すぐに部会がスタートできるのでしょうか。

それから再編整備に関する事項でございますが、たたき台を「受け入れる」という形ではなく「聞き置く」という形で、仮想で再編整備について話し合えないものかと思っております。

例えば、名前が示されたところについて考えてみる。2 つの高校が統合される場合、どのようなことが考えられるのかということを仮想して、その中で出た疑問をひとつひとつ

について、県教委のほうから解決していただく。単に白紙撤回せよというのではなくて、具体的に話し合いを進めていかなくては、本当にこの再編のたたき台が正しいのかどうかということも分かりません。私たちが責任を持って自分の考えをこの場で話し合うべきであると思います。

また、第3通学区は広域なので、北の端から南の端のことを理解することは難しいと思います。けれども、やはり広域で考えていくべきだと、私は思っています。

それから職業科、工業科や農業科についてですが、特に農業科については、卒業した子どもたちが農業に定着しないとか、進学率が高いというものについても、私は高校で農業科を取った子どもが農学部に進学することは大いに結構だと思っていますし、また工業科を卒業後もっと深く学びたいという目的で、工学部などに進学するということは、素晴らしいことだと思っています。

私は普通科から農学部に進学したのですが、周りにいた友人たちは、農業科から農学部に進学してきた。そういう人たちは、既にエキスパートなんですね。スタートから、目的を持って勉強できるので、在学中にかなり研さんを積めるのです。4年間は無駄ではないんです。そして、それぞれの地域に帰っていきました。

そのような事実を知っているから、何かひとつ自分が持っているものをもって、スキルアップのために進学するということは、私は大変結構なことだと思いますし、長野県の産業の発展についても、将来大いに期待できるものだと思っていますので、職業科を卒業したら、すぐに地域に帰って就職をしてということを、子どもたちに強要はしないほうがいいのではないかと、考えています。

魅力ある高校づくりに関する項目ですが、魅力ある高校というのは、私にとってはどのようなところだろうかと思ったときに、やはり高校ということは学力をつけるところだと考えておりますので、どこの学校に進学しても、センター試験を受けられるカリキュラムを組んでいただきたいと思います。

そうでなければ、希望したところに入れなかったから、例えば二次募集でこちらの高校に行ったら、自分の思うところと違っていた。だから高校を中途退学して、別の道を選ぶというようなことが起こり得ます。それも本人の人生ですからいいのかもしれませんが、高校時代の3年間を、3年間として過ごしたほうが、私はいいと思っています。

例えば、希望する高校に受からなかったから、1年間浪人して高校を受験し直すという子どもが多いのに、私はびっくりしました。高校浪人です。中学生が卒業して浪人しているという事実が、いまだに理解できません。中学校から高校というのは、やはりストレートに入ってほしいと思います。高校生活とは、自分の生き方を見つけるという、何か生き方をしっかりさせるという3年間なのではないかと思っていますので、そこで挫折をしてしまって計らずもというようなことを15歳の子どもには経験させたくないと思っています。

ですので、ちょっと考えがまとまらなくて申し訳ないのですが、私は、魅力ある高校づくりのまず第一は学力を付けること。それから、子どもたちが多くの選択肢から選べるような高校であることを望みます。そんなところから話を進めていく中で、こちらの疑問について県教委の方々からご発言をいただきたいと、疑問にお答えいただきたいと思います。



(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは関委員をお願いします。

(関 委員)

先ほどから、いろいろ話題になっておりますが、学力による輪切りというのは、確かに存在するわけでして、この現実に対して、各高校でそれぞれ希望する進路を実現できるよう努力しているところであります。

もうひとつ、中学卒業生の都市部指向ということも、また大きな要素のひとつといえるのではないかと思います。

学力は、魅力ある高校づくりの一番の根本なのですが、学力というのは、高校だけの問題ではなくて、中学校や小学校からのつまずきによるものも多く含まれております。特に数学ではそんなことが言えますので、旧通学区単位で、今、中高連携あるいは小中連携まで含めて取り組んでいるところでもあります。学校は、これは前にも申し上げましたが、それぞれ多様な使命あるいは目的を持っておりまして、一概に特点の観点から評価できるということはないので、そこだけは押さえていかなければいけないところであると思っております。

それから、先ほど部会の問題が出ておりますが、今、丸茂委員さんからのご発言のとおり、また部会を設けて最初からの議論ということになりますと、たぶん時間的にも非常に無理であると思います。

それから以前も申し上げましたが、3つの部会をつくったところで、結論が皆同じになるとは思えませんし、異なる結論が出てきたときに、この推進委員会でどのように扱ったらいいのかと、苦慮するところでもあると思います。従って部会の設置については、私はいかななものかと思っております。

それから地域高校の問題ですが、確かに幾つかの問題、あるいは課題を抱えておりますが、現在のある状況の中で、これを克服していただければというように思っております。

以上です。

(池上委員長)

今の、克服というのは、「残して」ということをおっしゃっているのですね。

(関 委員)

そうですね。

(池上委員長)

はい、ありがとうございました。

それでは、藤本委員。

(藤本委員)

幾つかのご意見が出たと思いますが、まず、あくまでも県教委の案はたたき台ということですので、一応頭の隅に置くということで議論していただければということです。

先ほど岡庭委員さんが、県教委は、例えば商業高校はどうするんだ、工業高校はどうするんだ、どういう考えを持っているのか、それを明らかにすべきだという発言があったのですが、私は、若干内部には持っているのではないかという気がするのです。

例えば、マスタープランというのを発表したときに、マスタープランでは、職業高校は全て総合学科に変える、もしくは各通学区に1校のみにして、全て総合学科に変えるとなっていました。これだけの意見をマスタープランで述べているということは、それなりに、職業高校に対して、県教委はある程度考えを持っておらなければ、これほど大胆な考えは出てこないのではないかと私は思います。

ただ、私は高校改革プラン検討委員会の議論を眺めていましたが、議論の中では、高校を統廃合するための数合わせの議論は一生懸命したけれど、魅力ある学校は、いろいろ出てきましたけれども、別に文科省のお薦めの、東京都辺りでは既にやっている学校です。総合学科を各通学区に1校ずつつくる、多部制単位制を通学区に1校つくるという方針は別に高校改革プラン検討委員会で議論しなくても、既に他県の様子を見れば出てくるとだと思います。

マスタープランでは、それが出てきているわけですので、職業高校に対して、県教委はそのような考えを持っているのではないかと思います。

小口委員さんなら詳しいと思うんですけど、長野県の製造業は、東京都や他県に比べても、かなりのパーセントを占めておりますし、長野県の職業高校の生徒は非常に優秀で、職業高校から国公立大学への進学率は、全国で5つの指に入るんです。それほど職業高校の生徒は優秀ですし、前回、私は、職業高校のデータを出しましたが、検討委員会でも生徒の入口出口問題がかなり議論されておりましたが、職業高校もかなり意欲的な生徒も入っているし、卒業後もそれなりに頑張っていると思います。

それから、部会は、県議会の決議で「ちゃんと生徒の意見も聞きなさい、地域の意見も聞きなさい」と、それを実現するのは、部会以外にないのであって、時期がどうだ、メンバーがどうだと言いますが、やはり教育の住民自治の意味からも、県会であれだけちゃんと決議されているわけですから、そのような機会をぜひ持っていただきたいと考えております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

今のご意見の中で部会の話ですが、ちょっとお休みをさせていただいて、あの時計で10分後に再開をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

【休憩後再開】

(池上委員長)

それでは再開をいたしたいと思います。

魅力あるという世界に、かなり踏み込んでいただいていると思います。もう少し、先ほど後半のところにも出ました部会議論を含めると、どうしてもこれは、先にコンセンサスを得ていかなければいけない問題だと、私は認識して思うのは、諏訪の問題です。これについては、私見をあえて申し上げれば、諏訪もこのような議論があってしかるべきというような認識を、強く持っています。

従って、たたき台であるというふうに私は思っています。今のところの話に、少し触れて会をすすめさせていただきたいと思います。

(小坂委員)

この問題については、お話を申し上げたと思いますが、この前、北原委員さんに資料を出していただきました。ほとんど上伊那と諏訪は、生徒数その他、著しい差違はない。しかも、上伊那は8校、そして諏訪は9校あるわけですね。1校多いわけです。そうした中で、私立の問題や、上伊那から諏訪へ行っている、あるいは諏訪から山梨県へ、県外に行っているという問題がありますが、県教委のたたき台で、諏訪がひとつも触れられていない、このようなことで、やはりこの場でやるのは、将来的にはそうした問題を地域毎に解決していかなければいけないと思っているので、もし部会を設置するなら、やはりたたき台は棚上げして、それぞれの3地域が、県教委の意向に沿った形で改革ができるかどうかということを検討することは意義があるというように思っております。飯田・下伊那の皆さんは部会設置を求めています、前提としては、当面それぞれの、諏訪で1校、上伊那で1校、下伊那で1校という形であれば、私は部会設置もやむを得ないと、そこで議論を深めていくというのは、やはり地域性からみて必要なと思っております。

以上です。

(熊谷委員)

先ほど丸茂さんや関さんのほうからお話でしたが、部会の設置要綱につきましては、推進委員会の設置要綱に載ってございますので、それに基づいて設置していただければ、すぐにでもできるというように思っております。何を部会へ問うのかということについても、当然、ここにも書いてありますが、地域出身の委員が責任を持ってやるということで、例えば私も、第9通学区に行けば3人委員が出ていますので、3人の委員で話し合って、では誰かが代表になって、意見をまとめようじゃないかということになるかと思っております。

それと、異なる意見が出たときにどうするんだというお話でしたが、例えば第9通学区が部会をつくったときに、では総合学科を、第3通学区として設けるか、設けないかという議論をするような部会にはなるはずはないと思うので、異なる意見が出るということは、あまり可能性はないと思います。

第9通学区の改革をどうするのかという議論を、第9通学区として行うのであって、例えば諏訪で、では飯田の高等学校をどのようにしようという議論を、部会でやるというイメージにはならないと思いますし、飯田の代表で部会をつくって、諏訪をこうしようみた

いな話ができるかという、できるはずはないと思います。あくまでもそれぞれの旧通学区ごとの議論が、部会ではされる話であるので、別に異なる意見が出てくるということはまず考えられないので、そのような意味でいけば、別に部会設置というのは十分可能だと思います。

特に、飯田・下伊那などは、いい悪いは別にして、県教委のほうから案として示されているもので、非常に大きな衝撃が走って、地域に大きな議論が巻き起こっているわけなので、それを吸収し、またこの委員会に反映するためにも、部会を設置してもらって進めたいというのが、飯田市の関係者の総意であります。

先ほど丸茂さんが、「部会は簡単にはできないんじゃないの」と言いましたが、それこそすぐにでも、飯田・下伊那がつくれと言え、つくる準備もさせていただき、やりたいと思いますので、ぜひそこら辺については、なにぶんよろしくお願いしたいと思います。

部会設置が駄目だという根拠がどうしても分からないので、もし駄目だとするなら、次回あたりに、何で駄目なのかというのを、はっきり県教委の意向として、お示しいただきたいというように思っております。設置要綱にこれはできると書いてあることですから、それができないというのは、どうやっても私は納得できないので、ぜひお願いしたいというように思っております。

以上であります。

#### （ 関 委員 ）

部会というのはあくまで、県が示した原案に対してどう考えるかを検討する部会だと私は思っております。ですから、私が申し上げた「結論が異なる」というのは、例えば第 7 区の部会が、県が出した原案に賛成、第 8 区は仮に修正案を出したとして、第 9 区は白紙撤回だという結論になったときに、この推進委員会としてどのように考えていくかということ、また非常に困った問題になるのではないかと、その点を申し上げているのです。

#### （ 小林委員 ）

部会のことと、諏訪をどうするかということと、合わせて言わせていただきたいのですが、私は前々からここで発言しているように、やはり諏訪も 1 校を対象にするべきだと考えます。それは、この第 3 通学区は、ほかの通学区と地理的な状況が全然違って、上伊那、下伊那、諏訪のそれぞれ、経済的にもまとまった地域であり、諏訪の隣の松本や長野辺りとは根本的に違うからということと、もうひとつ、県教委で示した、H30 頃でも諏訪がそれほど生徒数が減らないという、それだけの根拠で対象にしないというのを、最初から疑問を持っていたわけです。

どうしてかという、それぞれの地域の特性があって、従来から下伊那は、固定的な地域であり、ほとんど外へ出て行かない状況です。上伊那は、従来、諏訪へ流れることが非常に多かったが、最近はそのが非常に変化してきている、流動的な地域。それから諏訪は、鉄道が便利になったということもあって、いくらでも松本、松塩筑に流れる、それからこの前も出たように県外へも流れる、非常に特殊な地域だと思います。

そのようなことからいって、ただそのときの生徒数がそれほど減っていないというだけで、あのように決めるのは、私は非常に問題かなというように思います。

次に、部会のことですが、私は、部会についてはずっと、「ちょっと本当にいいのかな」と迷ってきましたが、次のような条件なら場合によって可能ではと思います。

関先生のおっしゃっている部会を設置すると新しい委員が人選されるため、また1からやり直しをしなければいけない。この問題は私もとても分かります。

だから、部会を設置するならば、今の委員の中で部会を設定する。ただし、「では次の回にやりましょう」というのではなくて、例えばさっき言ったように、各地域1校ずつというようなことや、違う視点もある程度共通理解されたときに、分かれてやるのがいいかなと思います。

そしてその上で、あくまでも委員が、どうももっと具体的に明らかにするのに、この資料が不足するという場合、例えばさっきの資料でいうと、今の単位制、例えばあのシミュレーションで、A高校、B高校がC高校になったときに、では少人数学習とか習熟度とか、いろいろなやり方で学力アップを考えているのだが、ではそれが、実際の先生方の持ち時間が、現状の中でどうなのかというのは、その辺はここで議論しても分かりませんよね。そのことに対して資料を求めると、こちらからも資料を求めるために県教委に聞くということなら、それはそれでいいのではないかなというように思います。

以上です。

(小口委員)

今、小林さんから大変いい意見が出たなと思いました。

部会をこの中でというのは、あまり必要ないと思っていましたが、そのような意味では、分からないこともあります。いろいろ教えていただきながらやっていくというのは、非常にスタンスがある程度そろっておりますから、いいのではないかなと思います。

また、地域に持っていったらまったく別な部会という形をとると、「これまた1から」というようになりますので難しいと思います。

それから、諏訪地区については、私は前から言っていますが、減らしてもいいと考えます。高校というのはある程度規模を持ったほうが、子どもたちにとっては社会性が育ったり、あるいは先生が多くなることによって、いろいろな多方面での才能を伸ばすことができると思っていますので、そのようなことをしながら、諏訪も、子どもたちにとっていい地域に、もっと一歩近づくことができるかなと、そのように思います。

ただ、県の候補案でありましたように、諏訪地域はあまり削減幅が、将来を見通したときに少ないということでもありますので、やはり削減して少なくなっていくわけですから、統合ということよりも、例えばジョイントなどの形態を経て、将来に向かって進んでいくような段階的な部分も考えられるのではないかなと思っています。

(吉江高校教育課長)

いろいろご熱心なご議論をいただきましてありがとうございます。

2点申し上げたいのは、部会について申し上げますと、これは要綱の中にもありますように、教育委員会が委嘱した者をもって組織するという位置付けになっておりますので、仮に部会をお決めいただいたとしましても、私どものほうで委嘱するというお話になります。

それで小林委員さんからもお話がございましたように、当然ながらここに所属する方々、いろいろな考え方はありますが、当然ながら部会を設置するとなりますと、そこでしっかりした一方向の議論ではなくて、いろいろな意味合いのご議論をいただかないわけにはまいりませんので、そのような意味では非常に人選ということは、かなり難しい面もあろうかとは思っております。もちろんほかの委員さんが入った場合ということでございます。

川島委員さんから、先ほどちょっとお話しいただきまして、それについて私のほうでお答えしてございませんので申し訳ないのですが、それぞれの地域で、いろいろな議論があって、特に飯伊地域の場合には、いろいろ検討をいただいているということにつきまして、私どものほうでも承知しております。

それで、そういうような場面に、県教委なりで説明も含めて来られるのかというようなお話をちょうだいいたしましたが、これにつきましてはご要請をちょうだいすれば、私どものほうで伺いたいと思っていますし、そのような地域ごとのいろいろな意見につきましては集約して、この委員会におきましてそれぞれ地域ごとに、委員さんにおみえになっていただいているわけですから、合わせてご提案等もいただくという方向も、当然あるのではないかと考えております。

あと旧7区、いわゆる今の諏訪・岡谷地区のお話について申し上げますが、私どものほうのデータ上、生徒数がほとんど減っておりません。それでこの数につきまして申し上げますと、平成15年までの旧12通学区制から、平成16年にいわゆる4通学制に移行しまして、県全体で400人まで、区間移動の数が増えておりません。300数十人のみが区間移動をしておりまして、4通になりまして、大幅に区間移動が増えてはいないというのが現状でございます。

それで、私どもの方のシミュレーション自体も、当然ながら従来からの区間移動まで含めて考えておりまして、そのような意味では、旧7区から出る人、あるいは旧7区から、県外まで含めまして入ってくる人まで見た上での数字でございます。

今後7区について、いろいろ議論があろうかと思しますので、こちら辺の推移につきまして、この考え方につきましては、もしよろしければ次回お示し申し上げたいと考えている次第でございますので、その辺も合わせてご検討いただきたいと思います。

(池上委員長)

分かりました。

(小林委員)

ちょっといいですか。

課長さんの発言についてですが、この前も諏訪のことを言ったら、こちらで求めないのにこういう事情だと、諏訪の事情についてはすでに説明しているのに、何回も何回もそのようなことを言われると、では諏訪を対象にするのは、県としてどうしても困るという意味で言っているというようにしか解釈できないので、あくまでも県教委というのは、こちらで求めていることだけを答えていただきたいと思います。

よろしくお願いします。

(吉江高校教育課長)

では、ちょっといいですか。

(池上委員長)

はい、どうぞ。

(吉江高校教育課長)

失礼しました。その点につきましては、お詫び申し上げます。

ただ1点だけ申し上げたいのは、私どもはそれぞれの区ごとの基本的な数の推移というのをベースに、ひとつずつ考えた経過がございますので、それにつきましては先ほど、小林委員さんからのお話がございましたように、以前もお伝えいたしましたが、同じような形で議論が、恐らく第3回の議論が、また繰り返されているというような感じがございましたので、申し上げた次第です。

(岡庭委員)

今、県教育委員会が委嘱するという、部会の話がありましたね。その県教育委員会が部会を委嘱する場合は、およそ何人ぐらいで、どのような形で委嘱するというようなお考えでそもそも始まっているのか、ちょっとその点だけお聞きしたいのですが。

(吉江高校教育課長)

ケースバイケースで、実は実際問題として、以前も私はそれを申し上げたもので繰り返しになって失礼かもしれませんが、そもそも部会を設置する限りは、その部会においてどのような議論を提案して、この推進委員会においてどのような議論をしてほしいということを決めていただいた上で、具体的には設置しなければいけないものだと考えています。

それを考えた場合に、その決めていただいた内容によりまして、ある程度当然ながら数も、いわゆる多い少ないがあろうかと思っていますので、そういう意味では、ここにありますようにフレキシブルに考えています。ですから具体的に数を明確にしていらないということでございます。

(熊谷委員)

推進委員会の設置要綱に、部会を設置するというのを取り上げていますので、仮にひとつの考え方として、第9通学区出身の3人の委員で部会を設けて、設置要綱の第6条の第3項に、「推進委員会は、必要があるときは関係者の出席を求め、その意見を聴取することができる」という文言がありますので、その3人の部会委員が必要と認めた関係者に集まっていたいて意見を聴取して、それを3人の部会の委員会集約として、ここの委員会に反映していくということは、当然可能なわけですね。

ですから、先ほど言いましたように、高校生の意見も聞きたいし、地域の、行政の関係者の意見も聞きたいし、PTAの意見も聞きたいという3人の委員の意向で、地域で関係者から意見を聞いて、地域の意見を吸い上げて、3人の代表する部会委員としてこちらへ反映するということはひとつの検討課題として可能だと思います。

新たな委員を設けるとすると、人選やら委嘱やらで難しいということになれば、この現在いる委員で部会を設けさせていただいて、その委員が必要とする関係者から意見を聴取してまとめて来ると。このようなことでも、それはいいと思います。

（池上委員長）

それは、インフォーマルな組織ですから、その議論をなさること自身我々が抑制する、またそうする理由は、私はないと思います。その意見をまとめられて、ここで皆さんに開陳していただいて議論していただくというのは、別に問題はないのではないですか。いかがですか。そのこと自身には、特に私が肯定する必要はないと思います。それが、「部会だ、部会だ」という話は、ちょっとおかしいのではないかというふうに思っています。

（岡庭委員）

何のために部会設置するのかという議論だと私は思うのです。これは、先ほどからの議論と非常に深いかかわりがあると思っているわけですが、県教委から出されたものがこれはたたき台で、頭の隅に置きながら、本当にこの地域の子どもたちが幸せになるための高校教育は、どうあったらいいのかという議論をしようではないかというのが、先ほどまでの、この委員会でのたぶん到達点だったと思うんですが、委員長、そのようなことでいいですか。

そういうことになると、その地域、地域で、子どものためのどのような学校をつくっていったらということになると、先ほど小林委員さんがおっしゃいましたように、第3通学区は、明らかに3つの地区に分かれているんです。それで、関連性はあるといいながらも、特に飯田・下伊那なんかは、これは関連性もないし、特徴とすれば阿南高校や阿智高校の話が出ましたが、山あいの中の集落に学校があるというような状況ですから、そのようなことも含めて、やっぱり地区ごとにどういうことが、その3つの地区の中で、どのような学校を考えたらいいのかということを考えるのは当然のことだと思うのですね。

そこには、いわゆる産業の立地も、基盤も違いますし、地域ももちろん違いますし、それから通学圏域も距離も違うということを考えれば、やはり3つの地区で、どのような高校があったらいいのかということを、短期間にある程度方向性をまとめて、そこで議論するということは、当然これはやらなくてはならないことで、この第3通学区全体としては、諏訪のことを語るわけにはまいりませんし、伊那のことを語るわけにはまいらないので、そのようなところはやはり部会を設置して、先ほど小坂委員さんがおっしゃられたように、まったくたたき台のことは隅に置いたところで、それぞれの地域の高等学校がどうあったらいいかということを議論していただくのは、これは当然やらないと議論が前に進んでこないのではないかと考えているのです。

例えば、北原先生の資料で「習熟途上校」というのがありますね。これは、いいか悪いかという議論とは別に、非常に私とすれば感覚的には非常に的確だなと思っているものですから、これを使わせていただくのですが、実は飯田市内には、旧市内を含めまして、座光寺、上郷、県、飯田市というところ全体を見まして「習熟途上校」は全くないですね。それから、あと進学高校が2校と職業高校が3校あるということですから、就業によい高校ということになると、松川高校と阿智高校と阿南高校がある。これはたぶん上伊那とは



状況が違うし、諏訪とも状況が違うと思います。

そのようなことから考えると高校の配置はどうあったらいいのか、先ほど丸茂さんがおっしゃったように、私も、同じ長野県立高校だったら、少なくともやはり共通一次試験の土俵にはしっかり上がる、そのような教育だけはしてほしいというのは、誰もの願いだと思うのです。

しかしこの間、飯田高校の校長先生のお話をお聞きしたら、これは今難しいという話がありました。いわゆる共通一次の科目が増えてきたことによって、非常に難しいと。教員の配置からいっても、今の飯田高校の教員の配置でギリギリのところだというお話があったわけです。そのようなところから考えると、共通一次試験を受ける、その土俵に上って受かるということまでを教育するということが、すべての高校で保証できないというのが、今の長野県の実状だということがよく分かったわけです。

そのようなことを含めて、それぞれの地域がどうあったらいいのかということは、やはり3つの地域の部会で、しっかりと議論をすべきだということに、私は思います。

（池上委員長）

今のお話で、例えば下伊那で3名お集まりいただいて、万が一議論していただいても、それは私は全然問題ないのだというように思っています。

私なりに考えておりますのは、「果たして年末までにまとまるのかな」という疑念さえ持っていますので、それはもう毎日やっていただいて結構だと思うんです。上伊那も諏訪も、自然発生的にそういう議論は出てくるだろうというふうに、私はある意味では期待しています。

ただ、先ほど関委員がおっしゃったように、横断的な問題として、この第3通学区としてどうするかという議論は当然あるはずだという世界もあるので、ここの委員会は、それが重要なのだという世界に帰着すると思いますので、今、課長がどのようにご発言するか分かりませんが、私はそういうふうに進めていただいて結構だろうと思っています。

いかがですか。

（吉江高校教育課長）

委員長さんがおっしゃられるとおりで、それでまた、先ほどもちょっと熊谷委員さんからお話でしたが、委員会に当然ながら関係者をお呼びしましてご意見を伺うというような場面も、当然必要があればご決定いただければ、ぜひしていただきたいと思っています。

また場合によりますと、各地域に例えば開催いただきまして、その議論をその地域において議論いただくというようなことは、もちろん可能だと思いますので、委員会の運営としましては、いろいろなやり方があるかと思っています。

（池上委員長）

それで、ご承知をいただきたいと思いますが。

(岡庭委員)

問題は費用弁償です。

我々3人が各通学区に必要なだと思って、委員の人たちに集まってもらった場合に、費用弁償をどうするかということについては、どうすればよろしいのでしょうか。

まったく任意でやるのかどうかということについて、現時点での考えで結構ですが。

(吉江高校教育課長)

申し訳ございません。ちょっと想定しておりませんでしたので、ちょっとそれについては次回までに考えさせてください。

(岡庭委員)

私の提案とすれば、ある一定量の予算は確保し、その中で委員長と相談しながら進めていくということで、提案していただければいいのではないかと考えています。これを参考にしてください。

(熊谷委員)

すいません。

私になぜ、あえて部会にこだわるかというのは、第9通学区の委員の皆さんが、とにかく任意で会合を開いて意見を聞いて来たんでしょということと、やはり委員会として、というか認めた部会ということで地域の声を集約したというのでは、やはり位置付けが違っていると思うのです。

設置要綱の中に、あくまでも部会を開いて地域の声を吸い上げることもあるということですが、はっきり明記されているわけですから、3人で任意でやるならやるでもいいのですが、やはり少なくとも、第3通学区の推進委員会としては、では飯田・下伊那で3人の委員が、部会という形で活動するのを認知しましょうというくらいはせめてやってもらわないと、やはり、その意見を持って来たときに、「それは皆さんが勝手にやったことでしょう」というように扱われては困るということを言っているわけです。

そのところはやはり要綱にあることですし、それは別に、今さら大騒ぎしてやるということ自体ではないですが、あくまでもこの推進委員会として、では飯田・下伊那の第9通学区の意見を集約するために、3人の委員が部会ということで活動していただいて結構ですよ、ではその意見を持って来てくださいよということくらいはせめてお墨付きをもらわないと、この委員会の中で委員が勝手にやったよという話になったのではどうしようもないということを言っているわけです。

以上です。

(北原曜委員)

部会のことですが、前回、「部会設置は当面は認めない」ということでもう解決済みかと思っていましたが、またぶり返しているようなので困ったものだと思っています。

まず、第3通学区全体をではどうするのでしょうか。諏訪と上伊那はどうでもいいのでしょうか。これを私は言いたいです。

全体を、まず考えてやっていかなくてはならないのではないのでしょうか。まずは今日の話で、魅力ある高校とはどのようなものなのか、それではどのような改革が必要なのか、そのときに、県の教育委員会の案と照らし合わせて、どのようにでは改革案をつくっていったらいいのか、これがこの推進委員会の役割、スケジュールだと思うのですが、現段階で部会ということで動き出すと、まずひとつは、県教育委員会の案を是として、それからスタートするわけです。それではまずいわけですよ。これは全体でまず考えなくてはならない問題なんです。自分のところだけよければいいという問題ではなくて、まず全体でコンセンサスを得てから進めていただきたいということです。

（池上委員長）

いかがですか。

そのようなことで、先ほど課長のほうからも、費用負担の問題で関連するご発言もございました。

この委員会自身は、この通学区の問題でございますので、どのようなご議論をどのようななさるといいかと思いますが、そういう範囲でとどめさせていただきたいと、私は思っております。

（岡庭委員）

私は思うのですが、このような議論をやって、魅力ある高校づくりはどうかということ、かなり結論は難しいと思っています。

県教委の案に対してノーかイエスかなどという答えは、この委員会ではたぶん出ないと思っております。ですから、そういうことでありながら、県教委の案だけは独り歩きしていると、では来年の高校入試の募集もたぶん始まっているということになると、県教委の案が、放っておいて認知されるという状況になるということ、私は心配するのです。

ですから、そのような点で、部会で議論するということは、飯田・下伊那だったら、推進委員会だけの議論だけではなしに、やはりもう少しちょっと広いところで、私とすれば、いろいろ意見を聞きながら、産業界の意見も聞き、保護者の意見も聞き、それから中学校や学校の先生方の意見も聞いて、いろいろまた生徒の意見も聞いて、では旧第9通学区ではどうあったらいいのかという形で方向といいですか、考え方も出していきたいと思っています。「ノーならノー」というようなことも出していかざるを得ないなと思ってはいるのです。ここの推進委員会が、月1回ないし2回、議論しているだけで、なかなか全体的な方向性を出して結論まで出してしていくというのは、非常に難しいと思います。

（池上委員長）

従って、どのようなネーミングを使うかは別として、とにかくその議論を、連日連夜その地域でやっていただく、それは結構ではないかと申し上げているわけです。

それは、その前に結論でよろしくお願いしたいと思います。

諏訪の問題はいかがなものでか。

藤本委員。

( 藤本委員 )

いや、私は今の委員長の発言で結論が出たように思っていないが。

( 池上委員長 )

ええ、私はそう思っていますけれども。

( 藤本委員 )

例えば駒ヶ根市の意見書、これは委員長さんのところへきているわけですよね。これほど真剣に駒ヶ根工業高校の問題が議論されているわけです。先ほどから部会で、どういうことを議論するかまず決めてからだとか、この委員会で第3通学区全体の方向性をまず決めるといふことも当然と思いますが、まず地域の声を聞くということ、なぜ拒否するのか。

( 池上委員長 )

いや、拒否をしていると申し上げていません。私は、大いに聞いてくださいと申し上げています。

( 藤本委員 )

私も大いに聞くつもりでありまして、聞くのはいいですけれども、やはり最終報告でも、各旧通学区が実質的な経済および通学区だと言っているわけですから、そこの声をきちんと場を設けて聞く、我々が単にふらふらと聞くというんじゃなくて、きちんとした部会で、きちんとした公の場を設けて聞くということ、私はなぜしないかというのが理解できないのです。

( 池上委員長 )

私は諏訪のお話を申し上げていたつもりです。

( 藤本委員 )

そうですか。諏訪の部会ですか。

( 池上委員長 )

ほかの皆さまから諏訪についてご意見がそれぞれ上がったと思います。それについていかがでございますかとお聞きしたつもりです。

( 藤本委員 )

諏訪については、部会の中で議論していくことは重要だと思います。

諏訪が県教委の候補案で、対象外だから諏訪は必要ないというわけではない。あくまでも県教委の案は頭のどっかの隅っこ、片隅にあるだけであって、3 つとも諏訪も含めて部会をつくってそこで議論する…。

(池上委員長)

部会設置論ありきということですか。

(藤本委員)

私はきちんとした部会を持って、まずは地域の意見を聞くということがまず大事だと思います。

(池上委員長)

そういうことですね。

それはインフォーマルな組織で構いませんから、大いに聞いていただくということが必要じゃないかと思います。

(藤本委員)

インフォーマルにと、先ほどの熊谷委員さんじゃないですが、きちんとした組織だった会を設けて意見を聞くのと、インフォーマルに我々が歩き回って、「集まってください」といって聞くのとの違いに私は引かかるのですが。

(池上委員長)

実際問題でそれは違うのですか。

そのように、けん引してやらなければならないということをおっしゃっているわけですね。部会というものに動きがあってと、そういうことなのですね。

(藤本委員)

きちんと部会をつくり、それだけの組織をきちんとつくって意見を聞くべきだと思います。

(池上委員長)

それは任命権者の課長さん、いかがですか。その部会の話について、ちょっと見解を教えてください。

(吉江高校教育課長)

先ほど来私が申し上げた、先ほども北原委員さんからもお話しが出ておりますように、取りあえずこれにつきましては第3回目なり、あるいは4回目も若干出ているかと思いますが、基本的にこの委員会においてまず第7通学区をどういうふうな方向で考えるかというようなこととか、あるいは今後の全体をどう考えるか。実は非常にこの地域は、広域であるというお話はございますが、広域というサイドに立てば、第4通学区も広域です。

その辺がありますので、この第3通学区として全体をどう考えるかということを、できればそれぞれ委員さん方におかれましては、もちろんいろんな地域よりのご出身ということではございますが、全体を見渡せるサイドで、まずはご議論していただきたいと思っています。

その上で具体的な話が出た場合に、例えばの話が過日の委員会においても出ておりますが、部会をつくるということになれば、その部会から出た結果に対して、推進委員会はどのような位置付けで対応するのかと。部会の意見を、どのように推進委員会として受け止めるかというようなことも大事な内容でございます。

その辺を議論いただいた上でないと、直ちにというのはいかなものかと考えてはおります。それで私どもは、委嘱するような立場でということで申し上げれば、先ほど申し上げましたように具体的な議論は、どんな議論を部会でしていただくとか、そういうようなことをある程度決めていただかない限りは委員構成も含めては、直ちにというわけにはなかなかいかないだろうと考えている次第でございます。

(池上委員長)

ほかに意見はございますか。

(熊谷委員)

すいません。

今、課長さんの話の中で、第7通学区をどうするかをこの全体で議論してもらいたいという話で、委員長さんからも諏訪はどうするという話が出ていますが、私は順番が逆だと思うのですよね。第7通学区はどうするかというのを、諏訪の皆さんにまず考えていただくということで、諏訪の皆さんは一番よく事情が分かっているわけですから。そういうことの部会設置じゃないかと思うのですよ。そこで議論していただいたものをみんなで聞いて、「ああ、そうか」というふうになるのか、「それは諏訪の皆さん、地域エゴじゃないの」という話になるのかというのが、普通の議論じゃないかと思うんですよ。

ですから、何かこの場で第7通学区、諏訪はどうするのという議論をすることも当然必要かもしれませんが、では取りあえず諏訪の皆さん、諏訪の内情が一番分かっているから「諏訪としてどうするの、という議論してみよう」というのが、それが部会設置じゃないかなという気がするのです。先ほど北原委員さんもおっしゃいましたが、どれだけ魅力ある学校づくりの部分、別に部会設置したからそういう議論をこの場でやらないと言っているわけじゃないので、別にこの場の議論はこの場の議論であっていいと思うのですね。

先ほど藤本委員さんも言いましたが、やっぱり部会という立場でやる、ある程度委員さんでやる部分、インフォーマルにただ勝手に聞いてきてくださいよというのは、やっぱりそれは違うという位置付けだと私は思っています。

(池上委員長)

今の議論は担当する部門としては設置することについては否定的でございますし、私のほうも進行上、ちょっと無理だなという認識を持っておりますので、今日のところはその議論は見送りということにさせていただきたいと、なかったことにさせていただきたいと考えております。

ところで、今の諏訪の問題いかがでございますか。この委員会の中でテーブルに上げてその議論をさせていただくという方向でやらせていただきたいと思いますと思いますが、それによろしゅうございますか。

( 北原曜委員 )

前回、7月12日のこの委員会で出しましたように減少率に関する問題、それから各学区、旧学区ごとの高校数の問題。それから流出数および立地に関する問題、その他で7区のほうも十分考える必要があると思いますので、今の委員長の案に賛成です。

( 池上委員長 )

それでよろしいですね。

じゃあそんな方向でやらせていただきます。

( 関 委員 )

最終報告の12ページの資料にございますように、特にその資料の学級数というところに私は注目していただきたいのですが、しかし今日、もう時間も迫っておりますので議論することは構わないのですが、次回に持ち越したらいかがでしょうか。

( 池上委員長 )

何をですか。

( 関 委員 )

この諏訪の議論を。

( 池上委員長 )

次回に持ち越すということは、どういうことですか。その議論は。

( 関 委員 )

次回に議論したらいかがでしょうかということを提案申し上げたいのですが。

( 池上委員長 )

どうですか。その小坂委員最初の口火で。

( 小坂委員 )

はい。

この問題はやっぱり地域、地域で、地域エゴが出るなという感じがするのですね。だから私も、やはり公平な立場で第3通学区全体を見回さなければいけないと思っているのです。さっき第1通学区の問題が出ましたが、第3通学区というのは本当に特に飯田・下伊那は他地区との交流はないですし、それから上伊那と諏訪は多分に松本、諏訪地域は交流もありますし、諏訪も交流があります。

しかしこの12ページの資料から見てみますと平成2年の一番多かった時期の減少率からいきますと諏訪が54%、上伊那は60.1%と、逆に諏訪のほうが増加率が高いんですね。

事務局、12ページの資料はそういうことだね。

(吉江高校教育課長)

平成2年との対比ということで。

(小坂委員)

そういうことですね。

ですから平成2年の一番生徒数が多かったときと比べると、諏訪のほうがむしろ減少率が低いということで実数にしても、第7通学区諏訪が1,900、上伊那が1,800と、100しか変わらないですね。そしてしかも県立高校は上伊那が8校、諏訪が9校ありますね。

ですから私はこの前、北原先生が示した資料からいうとやはり諏訪がまったく無風だということは、これはほかの地から見ていずれまたそういう時代が来ると思いますね、さらに減少にというような、生徒数が減ってくるわけですから。そういう意味からいってやはり、ここはそれぞれの地域で、じゃあひとつずつ合理化するにはどうしたらいいかという前提であれば、やはり諏訪もそれを認めるべきではないかと、私はそんなふうに思っています。

(小林委員)

ちょっといいですか。

時間がないので、ある程度要点的に言いますが、やっぱり諏訪も対象にすべきという意見はかなり大部分の方から出ていますので、このことは全会一致をしないと進めないということになってしまうと何もできないと思います。

ですから、今、関先生のご意見もありますが、その方向でやっていっていただきたいと思います。これはあくまでも結論ではなく、「視点」だと思いますね。「視点」ですからもういっぺん振り返られるされることもあると思います。

具体的に検討していった場合に、やっぱり諏訪は対象にするべきじゃないということも、それはあり得ると思います。あくまでも視点ということでやっていかないと、これはどうしたって話が進んでいかないと思いますので、そういう方向でお願いします。

以上です。

(池上委員長)

うまくまとめていただきまして、ありがとうございました。まさにそういうことでございまして、横断的にいろいろな議論をして魅力ある高校づくりという議論をする中で、当然そういう視点が入ってまいりますので、そのことを包含して議論をしていただくということで、諏訪が入ることを拒否するということではなくて、それはそれでテーブルについていただくということにしていいただきたいと思います。

次回にまた、まったく違う結論をお出しになることがあっても、それはもう結構でございますが、今日のところはそういう方向でやらせていただきたいと思いますので、ひとつよろしくお願いしたいと思います。

それでは、今日は冒頭に地域校の話を申し上げて、やや不興を買いましたが、これは絶対に必要で避けて通れない議論になっております。必ずしも魅力ある学校でないことも承知しているわけですが、それはそれで大方のご理解をいただいたというふうに認識はして



おります。

それから今の諏訪の問題はそういう結論でやらせていただいて、いよいよ次回からは「魅力ある」という世界に入らせていただくということをお願いをいたしたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

それでは事務局から次回についてお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

それでは次回の日程について申し上げたいと思います。現在のところは8月の29日の月曜日でございますが、午前を目途に考えているところでございます。会場につきましても、伊那の辺りで皆さんがお集まりしやすいようにと考えております。

委員長さんともご相談の上、あらためてご案内を申し上げますのでよろしくお願いしたいと思います。

以上であります。

(池上委員長)

特にご意見はございますか。

(北原曜委員)

9月の日程はまだ。

(野村主幹教育支援主事)

9月の日程については、次回のあたりでお示ししたいところなのですが、傾向としては8月と同じ傾向でございます。ちょっと9月上旬のころに取れるかどうかというのは非常に苦慮しているところでございます。ですので、ちょっとそれ以上、まだ明確にはしてございませんが、状況としてはそんな感じでございます。

(池上委員長)

では、よろしゅうございますか。

(北原曜委員)

すみません。

ちょっと「魅力ある高校づくり」のところで私は資料を出しましたが、よく分からなかったのは商業高校なのです。商業高校と、それから総合学科校の塩尻志学館ですか。

もし次回、諏訪でやるならば、諏訪実業高校などを見させていただけるスケジュールを組んでいただけたら助かるなと思っています。

(池上委員長)

そうですね。

ここらでやるのですか。

(野村主幹教育支援主事)

会場は伊那でと考えております。もし会場があれば29日ですので、ちょっと場所が取れるかどうかですが、諏訪でやるといえばこれから探します。

(池上委員長)

それは、そのご意見を拝聴しておいて、調整をさせていただきたいと思います。

(北原曜委員)

次々回でもいいですよ。

(池上委員長)

そういうことなら、それがよろしいのではないですか。

(熊谷委員)

すみません。

先ほど第1通学区でも出たと思いますが、県教委が候補案をつくったプロセスなり、背景を説明するというのを、ぜひ次回にお願いしたいと思っております。

(小坂委員)

たたき台なんていないじゃない。

(野村主幹教育支援主事)

どっちにしましょうか。

(小坂委員)

たたき台はたな上げにすると、さんざんそういう話をしてきたので、説明はなくて進めればいい。

(池上委員長)

たたき台の件についてはプロセスが大変重要だという認識だと思いますので、資料のご提供をいただくということで、内容の議論はそのときにまたやらせていただくということで、あまりそれに深入りして、それで手を縛られるということがないようにしたいと思いますので、そんなふうにご認識をいただきたいと思います。

お出しいただけますね。

(野村主幹教育支援主事)

分かりました。用意する方向で考えたいと思います。

(池上委員長)

では大変ご熱心にご議論いただきまして、ありがとうございました。

では次回また、伊那の地ということでご認識いただいて、お願いしたいと思います。  
ありがとうございました。